

ドイツ普門寺・中川正壽老師より
善光二世中興大圓武志老師十三回忌に
因みお便りを頂戴しました。

大寂定中の善光二世中興大圓武志老師にご報告申し上げます。

平成二十八年(二〇一六年)に禅センター「愛禅佛府」大悲正法山興聖普門寺は創立二十周年を祝うことができました。

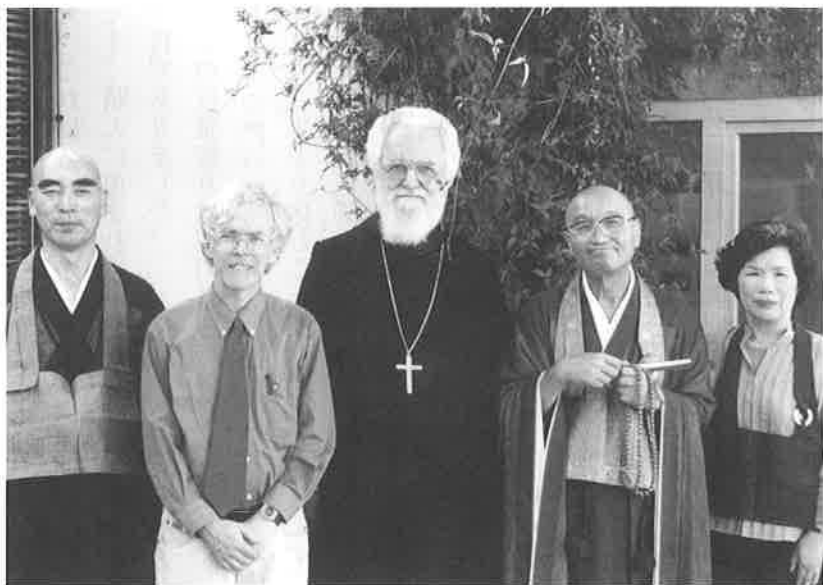
当日の午前には本尊上供、開山献供、サンガのための先亡諸靈諷経を勤め、終わって開山塔、開基塔、万霊塔等三基の開眼供養をいたしました。

午後からは恒例の紅葉祭りとして、日本から邦楽演奏家十人の方々の無報酬での演奏と舞踊をもって、三百人以上の訪問者に日本文化の精

華の一端を堪能していただきました。

当地エルルバッハ市市長は、「正直なところ仏教などまるで知らない土地柄、当初は大変危惧したが、中川老師はカトリックの祝祭にもまた教会墓地の葬式にも参列した。すでにセンターとは仲良くなっており、今ではこの禅センターを通して小さなエルルバッハ市が全国に知られて幸運なことだと思っている」と話され、最後に禅センターの発展を祈ると結ばれました。

次は曹洞宗宗務総長の祝辞が曹洞宗欧州総監によつて代読され、それはすぐにドイツ語でも読み上げられました。「今日の中川正壽堂頭が一九七九年の渡独以来の様々な困難を乗り越えて道心に燃えて誓願を忘れず、一九九六年に禅センター普門寺を設立、二〇〇六年晋山結制、僧堂開単を行い、一貫して毎年様々な教化活動が展開され、参禅者支援者の浄行と献身的な協力により今日の普門寺を築かれた」と敬意と感



2002年先代住職（右より二人目）ドイツ訪問時（左端 中川老師）

謝を述べられたものでした。

このあとは二〇一三年にも公演に来ていただいた邦楽グループの演奏です。

前回はドイツとオーストリアの国境トラウンシュタイン市にある旧教会のホールにて演奏していただいて、二百五十人を越える聴衆を堪能させていただきました。このたびも同じメンバーで尺八は横山鈴琥先生、長唄三味線は杵屋五三魅先生のほかにそれぞれの門弟方のほかにも琴、踊りと総勢十人にて邦楽や歌舞伎の世界をご披露いただきました。舞台はテーブルを使つての臨時ごしらえ、客席は本堂をはみ出して芝生の上にビヤガーデンの椅子を並べました。全体に大好評でありました。公演後はコーヒー、お茶、ケーキが出て、館内でも、また木陰でもそれぞれに話に花が咲きました。思い思いに池あり菜園ありの一万五千平方メートルの境内を散歩する人たち、二億年前の木が石になった坐

禪石で代わる代わる腰をかける人たちがいました。これはスマトラからドイツに運ばれたものです。晴天に恵まれさわやかなそして和やかな一日でありました。

この紅葉祭りは桜のころの春祭りと同じくセンターの門戸開放の日としており、設立時の一九九六年より休むことなく続けております。

それは武志老師からもご助言いただきましたように、異国異教の国にあつてはなくてはならない交流と信頼の機会であります。

さてドイツ普門寺創立二十周年ではありますが、全体を鳥瞰いたしますと、伽藍と境内の整備、サンガメンバーの育成と団結、若い世代への働きかけ、禅センター普門寺の経営と人事、冬の撰心と祖録参究の自利行、一年を通じての様々なコースを提供する利他の献身行、また撰心を中心とする坐禅の行と提唱やスタディーコ

ースの解の中道のバランスなど三次元四次元的に複合し合つて発展してゆかねばなりません。

これを思うとき直ちに生前の武志老師に参じてあれこれとご指示ご教訓を仰ぎたい気持ちでいっぱいになります。しかしながら根本は万古不易であります。それは道心を発し、参師聞法工夫坐禅、身心を脱落し迷悟を放下し、自利利他の菩薩行に邁進することであります。

老師はよくおっしゃいました。「宗祖を通じて釈尊に帰る」と。私はある時申しました。「その釈尊も越えてしまう」と。その時は舌足らずで私はそれ以上云えませんでした。老師はそれでは無茶苦茶になると眉を寄せられました。

武志老師、あれからドイツに帰つてまもなく言葉が出ました。「宗祖を通じて釈尊に帰る。釈尊を通じて自己に帰る」と。まことにこれにより仏教である必要もなく、まして曹洞宗である必要ありません。しかしながらまさにこれ



2006年普門寺十周年、普山式に随喜

が仏祖に立ち返り、仏祖の教えに沿うものであるがゆえに、いよいよ宗祖道元禅師は尊く、教祖釈迦牟尼仏は尊くおわし帰依帰順するものがあります。

「人間であるがゆえに坐禅する」。ドイツに来る前からそれを予感し、また信じておりましたが、ドイツに来ることができたお陰で、無条件にそれにおつかり、かつそれが自分の骨肉となりました。

しかしながら世知弁總とは程遠く世間音痴の塊のようなこの私を、老師は可愛がってください、過分の接待に預かりました過分にご慈慮をいただいて参りました。

ご懇意にしていたからまもなくの時、お寺というものはご開山というものが必要だかどうかするつもりだねとお尋ねになりました。私は先師の酒井得元老師が当然であると思っておりました。しかし武志老師はおっしゃいました。

それはもつともなことである。しかし海外に出たからには日本の中の師匠筋というのではなく、日本曹洞宗を代表する方に開山になっていただくのがよいのではないかと。

思ってもみないお言葉でしたが深く納得いたしました。同意するのならば心配は要らない、納が手はずを整えるとのことでお言葉で、その先はなにもお尋ねすることもなく、そしてほどなく大本山永平寺七十八世宮崎奕保禪師が普門寺御開山になっていただく允許が下りたのであります。後日人づてに伺ったところでは、武志老師は總持寺系と目されており、また宗門きつてのワンマン実力派であるところから、本山にあっては大歓迎というわけでもなかったと聞き及びました。

武志老師はこの私を見込んでくださいました。私の経歴はいつでもどこかで角を立て要らぬことを云い要らぬことをしてきたという、ひと

えに修行未熟人格未発達のお粗末ものであり続けました。

それゆえになおのこと私にとっては武志老師のご慈慮は身にしみてありがたいことでありました。

最後に老師に申し上げます。

宗祖を通じて釈尊に帰り、釈尊を通じて自己に帰る。この自己とは全世界にほかならず、生きとし生けるものすべてが全世界全自己であると承知して、志を新たにして普門寺の有縁無縁の方々とともに大慈大悲の誓願行を貫くべく仏神に加護を祈るものであります。今日の世界は一年が二十年三十年に当たる速さで動いているように思われます。その中であつてドイツ・ヨーロッパの大地に根を張る普門寺は上述の使命を果たすべく努めてまいります。何卒引き続きご指導ご鞭撻のほど心よりお願い申し上げます。

とはいえ恐れながらも私は世寿において老師

を越えてしまいました。このたびの十三回忌になる年月を思いますと、いまなお日本に帰れば善光寺に参つて老師にお目通り出来て、あれこれとじかにご報告できるような気持ちが強くと、老師のご不在が信じられない思いでおります。

しかし一端打坐に入れば時空なく、釈尊にお目にかかり、道元禪師にお目にかかり、幾多の祖師にお目にかかつて、もちろん武志老師にもお目にかかれます。

生前のご慈慮ご法愛まことにありがとうございます。ありがとうございました。

小子正壽、与えられた使命と寿命をもつて報恩の一事に努めてまいります。

何卒よろしくお願い申しあげます。

合掌

二〇一六年九月吉日

普門寺小住 中川 正壽九拜



先般は先代武志方丈様の十三回忌をまことに威儀ふさわしく無事円成されましたことに感服しかつ心よりお慶び申し上げます。またすばらしい位置に涅槃の塔を建立なされこれもまた御遺志の実現であると再び感服いたしました。

たくさんの方々のご焼香がなによりも先代様のご人徳とご偉業を物語り、かつそれが引き継がれて寺運の栄えを営まれている御日常を感得いたしました。

本来早くに御霊前にご報告すべきところようやくこのたびの機会を頂戴いたしました。ありがとうございます。

この上はご法体の堅固安穩をお祈りしました善光寺様ご一統のさらなるご発展を祈念申し上げます。

先般帰国の折には、ドイツ普門寺創立二十周

年にあたり、祝賀、寄付金を賜り有難く存じました。

皆様方の物心両面にわたる長年のご支援を糧にこの二十周年を迎えることが出来ました。心より厚く御礼申し上げます。

とはいえ坐禅道場としての普門寺はいよいよこれから本格的に機能してゆかねばならないと決意を新たにしております。

合掌

平成二十八年十一月十一日

ドイツ大悲山普門寺 中川 正壽九拜

